

<p>全体的な所感 (相談内容の傾向)</p>	<p>医療処置が必要な方の相談が多くあった。施設サービス・在宅生活のいずれにおいても、対応が困難である。施設サービス利用については、職員の配置・設備等の問題課題が多く、特に、夜間の看護体制のない施設がほとんどであるため、対応できる施設がない。在宅生活では、訪問看護やヘルパー等支援者同士の連携ができていて互いの不安解消に繋がり、本人支援がスムーズに行われる。また、ヘルパー事業所や訪問看護等の支援者から本人や家族の問題意識が低く、支援に困っていると相談があった。支援センターが関わることで、問題課題について整理することができた。</p>
<p>連携の取れたケースや工夫したケース等</p>	<p>虐待と思われるケースについて、ハローワークや障がい福祉課等諸機関に幅広く支援の要請をすることで、関わりをもってもらうことができた。支援者同士で、何ができるのか探しながら連携を取ることで、継続支援ができ、本人の意識変化へと繋がった。諸機関との連携により支援に結びついたケースである。本人と関わりのある人や支援者・職場先の職員等と連絡を取ることで、支援の統一をすることができた。</p>
<p>特に気になった点</p>	<p>身体障がい者においては、移動支援を活用して外出をしたくても、移動支援の対象者が限られているため、外出する機会・手段が少なくなってしまう。生活活動範囲が在宅中心となってしまうと思われる。</p>
<p>障がい特性による課題</p>	<p>医療が必要な難病者の在宅生活支援において、福祉サービスや社会資源が少なく、また対応が難しい状況がある。本人の安定した生活や家族への介護負担を軽減するためにも、訪問看護を中心に家族やヘルパー事業所等の支援者と連携を取る必要がある。福祉サービスの支給量についても、生活を大きく左右していると感じる。</p>
<p>地域の課題</p>	<p>障がい者や家族同士の話し合いができる場所等、集まる場所について問い合わせがあった。紹介できる情報が少なく、対応ができていない状況がある。退院や退所に伴い、在宅生活を考えても日中利用できる福祉サービスや場所がないと自宅にいる時間が多くなってしまう。社会との関わりがなく、情報交換の場という意味を含め、社会資源として集まる場所があると良い。</p>
<p>来年度の予定</p>	<p>専門機関や教育機関等の関係機関と連携を深め、少ない福祉サービスを最大限に活用することで、本人の自立に繋がり、家族への介護負担が軽減することができる。ライフステージにおいて関係機関と連携を取り、情報共有することで、継続した支援を行うことができると考えている。</p>

## 相談に関する報告2009年10月 ～ 2010年1月

全体的な所感 (相談内容の傾向)	家族が緊急入院するなどして、当事者の支援をどのように組み立てていくかという相談が多い傾向にあった。特に、老障介護の世帯でこういったケースが相次いだため、ケアマネジャーとの連絡調整も必然的に多くなった。また、このような事態に陥らないようにするにはどうしたらよいかという将来に備えた相談も目立った。
連携の取れたケースや工夫したケース等	病院・地域包括支援センター・社協・リーガルサポート・生活援護課・子ども政策課など各分野の専門機関との連携を密に行ってきた。各機関の役割分担を明確にしたことで、今後の見通しを立てることができるようになった。また、支援に入っているヘルパー事業所・日中活動系事業所とも連絡を取り合い、日々の生活状況をより細かく共有できるようになった。
特に気になった点	医療的ケアが必要な知的障がい者に関する相談が相次いだ。在宅で生活するにしても、居宅介護で支援できる範囲は限られており、訪問看護との連携も視野に入れて支援する重要性を感じた。こういった現状下で、キーパーソンである家族が支えられなくなってしまった場合、支援の組み立てに困難を要する場合が出てくる可能性がある。
障がい特性による課題	知的に障がいがあることで、その場の状況に応じた適切な対応を取ることが難しく、また、関係機関が直接状況を確認するまでに時間がかかってしまうことがあった。特に一人暮らしをしている方にそういった傾向が多かったため、キーパーソンの重要性を再認識することができた。
地域の課題	一般就労に関する相談が減少傾向にあるのに対し、この4ヶ月間は福祉サービスの利用に関する相談が相次いだ。障がいを持つ方にとって地域で生活する上で社会参加することの重要性を感じる事が出来たものの、現状では市内の日中活動系事業所は定員を満たしているところも多い。今後、養護学校卒業生だけでなく、企業離職者等の利用ができるかどうか不安が残る。
来年度の予定	相談支援は当事者のニーズをいかに的確に捉えることが重要になってくるため、当事者の力を引き出すことができるよう、課題解決に向けて具体的な形を視覚的な方法も交えて提示できるよう努めていきたい。また、課題のみに焦点を当てるのではなく、常に相談者の生きてきた環境や課題の奥に潜む背景を捉える事が出来るよう研修会にも積極的に参加し、相談員としてのスキルアップを図ることとする。尚、困難ケースには、医療・就労・行政・司法などの専門機関を交え、個別調整会議を今以上に開催し、協力し合って当事者を支える体制作りを構築していきたい。

障がい者生活支援センターまある

相談支援事業所 相談に関する報告 2009年10月～2010年1月

<p>全体的な所感 (相談内容の傾向)</p>	<p>相談者のニーズに応じてそれぞれの専門機関がケースにあたっているが、ひとりの当事者の方を取り巻く環境・背景は様々であるため、ひとつの機関で全てを担うのには限界も生じる。相談支援をやっている中で感じるのは、多面的にケースを捉え、それぞれ役割分担が明確になることでケースが動き出すということである。よって、各関係機関同士での、顔の見える関係・体制作りは大切であると感じている。</p>
<p>連携の取れたケースや工夫したケース等</p>	<p>19年度から継続的にご本人・ご家族から相談を受けているケースがある。自立を目指し、援護寮やグループホーム・アパート等への見学や体験、就労に関する支援を通所中の施設とともに行ってきた。様々な経過を得てこの度、援護寮へ入寮し、将来的には一人暮らしを目指していくための一歩を踏み出された所である。今後は援護寮スタッフとも連携を取りながら、相談を継続して行っていく。</p>
<p>特に気になった点</p>	<p>当事者の方からの相談を受ける中で、「不安はあるが一歩を踏み出したい」という『思い』があっても支援が届かないケースがある。その背景には、長年苦労をされてきたご家族の『思い』との行き違い、また抱え込みによって、支援の共有ができないという状態がみられる。すぐに解決はできなくとも、継続して相談を受ける過程の中で、互いの思いを共有できるような関係作りをしていきたいと思っている。</p>
<p>障がい特性による課題</p>	<p>思春期・成人期に発病したり、それまでは目立たなかった障がい顕著になることが多いため、その後の社会経験の乏しさから、人間関係の構築等に困難を伴うことがみられる。何か問題が起こった時に、その人自身の言動を問題視するのではなく、その背景を理解することが必然となるのだが、その理解がまだまだ低いといえる。関係機関が連携を取る中で、多面的に支援していくためにも、障がい特性の理解を進めていく必要性を改めて感じている。</p>
<p>地域の課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■住まいの問題については、これまでも課題として挙げてきたが、「自立」を目指す当事者の方にとっては重要な問題であるといえる。空き家と化している既存の建物を利用するなど、再考できればよいと思う。</li> <li>■発達障がい者への支援として、支援者側のスキルアップが必要であると感じている。相談者のニーズによって相談機関は変わるため、そういった視点を現場職員が持てるかどうかでケースへの対応も変わってくる。</li> <li>■現在利用している面接室が、相談者にとっても相談員にとっても構造上(音・スペース、設備等)最適とは言えないため、今後相談に適した環境が整えられると良いと思う。</li> </ul>
<p>来年度の予定</p>	<p>強迫性障がいを主に持つ方の、グループ活動を月1回のペースで行ってきた。参加者の方の声を踏まえ、来年度も継続して行うこととなった。また、相談の中でニーズがあれば必要に応じて小グループを立ち上げることも考えている。</p>

障がい者生活支援センターあつとわん

相談支援事業所 相談に関する報告 2009年10月 ～ 2010年1月

<p>全体的な所感 (相談内容の傾向)</p>	<p>自分の子ども(時には家族)が発達障がいではないだろうかなどの、発達相談に関しては時期に関係なく、毎月コンスタントにある(ほとんどが、新規のケース)。また、就園や就学が現実として保護者の意識の中に具体化してくる時期でもあるため、園や学校への不安が大きくなっている傾向がみられた。</p>
<p>連携の取れたケースや工夫したケース等</p>	<p>相談を受けていた子どもが通う園の方から、子どもの対応に関して迷いや不安があるので、相談をしたいと来所されたケースがあった。</p>
<p>特に気になった点</p>	<p>相談者の中には、新規で一度のみの電話相談で解決するケースもあるが、数カ月後に、同じ相談でその後、継続でつながっていくケースも数多くある。目の前にある不安や困難にだけ着目しがちで、成長する子どもの、少し先を考えるのはなかなか難しいのではないかと感じる。子どもの成長と共に、少し先を見据えてのアドバイスや支援が必要であると感じた。</p>
<p>障がい特性による課題</p>	<p>「発達障がい」は、外見で判断できるものでもなく、基本的な特性に加えて、ひとりひとりの特性もあるため、子どもを理解してもらうためには、園や学校がそれぞれの子どもに対して、どのようにアプローチしていけばよいのかということが、子どもの発達に大きくかかわってくると考えられる。その状況に応じて、保護者の不安がそれぞれに大きいと感じる。同時に、理解してもらえない現状、中途半端な理解によって親も子どもも傷つき、さらに不安へと追い込んでいるケースも少なくない。子どもの視点に立ち、支援を考えるにあたっては、その子をよく知る保護者、園や学校の先生の理解と対応、そして専門家や相談員などの専門的な見方との連携が不可欠ではないだろうか。各々のところだけで抱え込まない対策が先決と感じる。</p>
<p>地域の課題</p>	<p>働いている母親にとって就学後、学校または、放課後のサポート機関までの送迎が困難な場合、また、急用で送迎できないなどの緊急時の対策のためなど、移動支援の利用の有無の相談が多くある。しかし、現在は、通学での利用はできない状況であるため、さらに、どうしたらよいのか…との不安が大きくなる。場合によっては、レスパイトの利用も致しかたないと考える保護者もいるが、実際、毎日となると金銭的な問題や事業所の確保など、課題は大きい。いずれにしても、切実な課題であると感じる。</p>
<p>来年度の予定</p>	<p>発達障がいをはじめ、各方面の学習会の実施、スペシャルキッズの会でのピアカウンセリングの充実化、前年度から引き続き「メッセンジャー」の実施と、啓発を中心とした活動を予定している。またメッセンジャーの実施につなげられるような告知の仕方の見直しも必要である。</p>